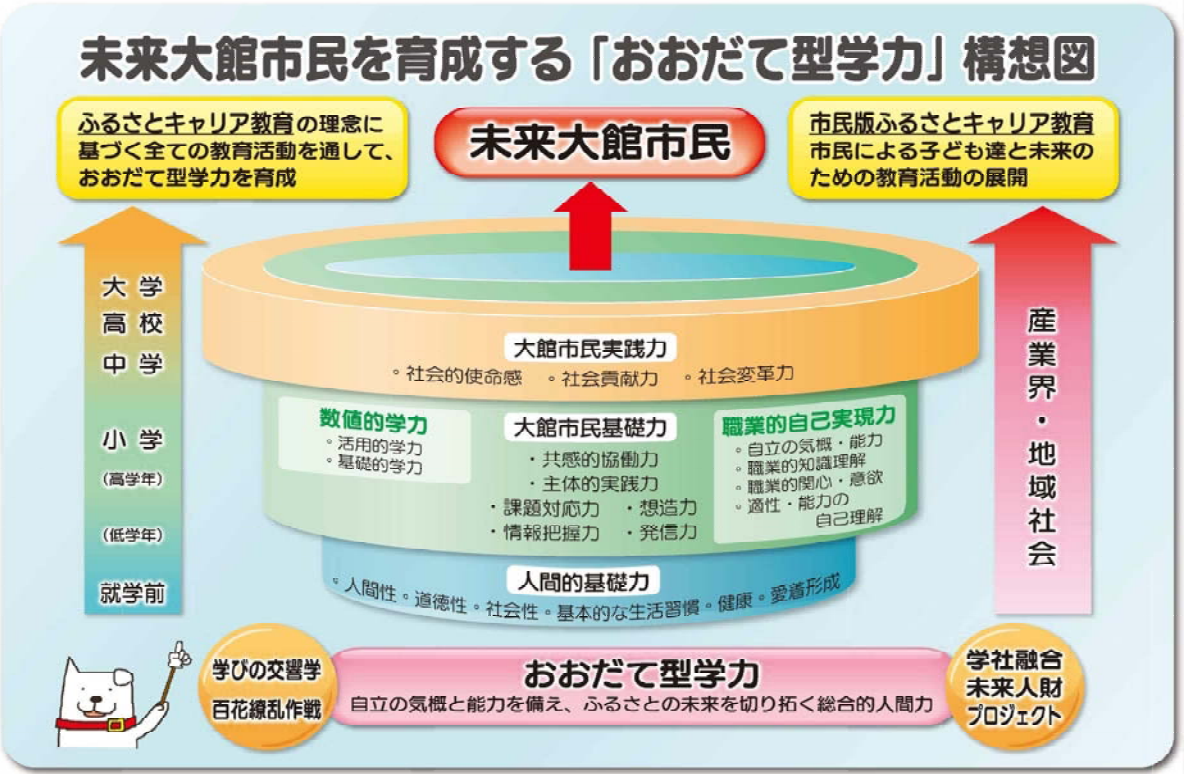
第9次学力向上に関する提言
（2019～2021年度）

共感的協働力を備えた未来大館市民を育成する『おおだて型学力』の確立

平成31年4月

大 館 市 教 育 委 員 会
おおだて型学力推進委員会



Ⅰ　第９次学力向上に関する提言

１　経過及び趣旨

平成２６年度から５年間、私たちは、「第８次学力向上に関する提言」に基づき、学校経営の根幹に「大館ふるさとキャリア教育」を据えて学力の向上に努めてきました。私たちが目指す学力とは、ふるさとの未来を切り拓く総合的人間力であり、それを「おおだて型学力」と称え、授業のみならず全ての教育活動を通じてその育成を図ってきました。

市内の各小・中学校が、学区の特色を生かした独自の活動を教育課程に取り入れ、その創意工夫により自校の課題解決を図る様は、他にはないその学校オリジナルの教育の花が、学校の数だけ咲き乱れる情景を彷彿させ、私たちはこれを「百花繚乱作戦」と呼び、この５年間で、本市の学校教育の進化を端的に物語る重要なキーワードに成長しました。各校の課題解決の過程においては、地域や企業との連携がより濃密になり、おおだて型学力を構成する「人間的基礎力」や「大館市民基礎力」、「大館市民実践力」が飛躍的に向上しました。全国学力・学習状況調査の質問紙における経年変化を見ても、子どもたちが未来大館市民として地域の未来を想い描きながら成長していることは明白であり、まさに「大館ふるさとキャリア教育」は、「社会に開かれた教育課程」として、学校教育の本質を射貫く実践であるといえます。

私たちは、「おおだて型学力」を高める施策として、「アクション」「シンキング」「チームワーク」の３つの視点から授業を構築してきました。その結果、全小・中学校で「主体的に学ぶ授業」「思考力・判断力・表現力を磨く授業」「集団で学び合う授業」の具現化が図られ、教室の中に、仲間と共に学び合い、高め合う、質の高い学習集団の形成が実現しました。

その成果を全国に発信したのが、全小・中学校で授業を公開した「秋田県学力向上フォーラム」です。参観に訪れた全国各地の教育関係者から、数多くの共感と賞賛が寄せられ、まさに大館が奏でる「学びの交響学（シンフォニー）」となりました。「おおだて型学力」の育成という、第８次提言を踏まえたこれまでの取組の大きな成果であると評価できます。

一方、新学習指導要領の趣旨に鑑みれば、現在「おおだて型学力」育成の取組において中心的に展開されている「学び合い、高め合い」の性状を、より高い次元に引き上げることが求められており、それこそが、「深い学び」の世界に至る鍵であると捉えます。そのためには、多様な考えを自己に適切に取り入れ、他者と協働しながら新たな価値を創造する学びの実現が不可欠であり、専門性の高い教材観や確かな授業観に基づいた教師のコーディネート、学習集団の中で個を高める支援、学びを価値付ける振り返りの場面等に一層の工夫が必要であることが課題として挙げられます。

そこで、私たちがこれまで、その獲得を目指してきた「おおだて型学力」を、これから訪れる新しい社会に必要な資質・能力に深化させるための施策として、「共感的協働力を備えた未来大館市民を育成する『おおだて型学力』の確立」を提言いたします。具体的には、子どもたち一人一人が、他者の個性を認め共感しながら、個々の能力を結集し協働して課題解決に挑む学びを目指します。この、共感的・協働的な学び合いは、授業において、子どもたちの知性・感性・人間性の響き合いを実現するものであると考えており、これを「響学」と呼ぶとともに、本市学校教育が目指す独自の授業スタイルとして「おおだて型授業」と位置付けるものです。この「おおだて型授業（響学)」により、これから起こるであろう様々な変化に子ども自ら主体的に関わり、多様な他者と協働しながら自分や社会の未来を切り拓いていく力を培うことができると考えます。そして、今学校教育に求められている『①子どもたちが様々な変化に積極的に向き合い、他者と協働して課題を解決していくこと②様々な情報を見極め知識の概念的な理解を実現し、情報を再構成するなどして新たな価値につなげていくこと③複雑な状況変化の中で目的を再構成すること（学習指導要領解説：総則編)』を具現化していきます。

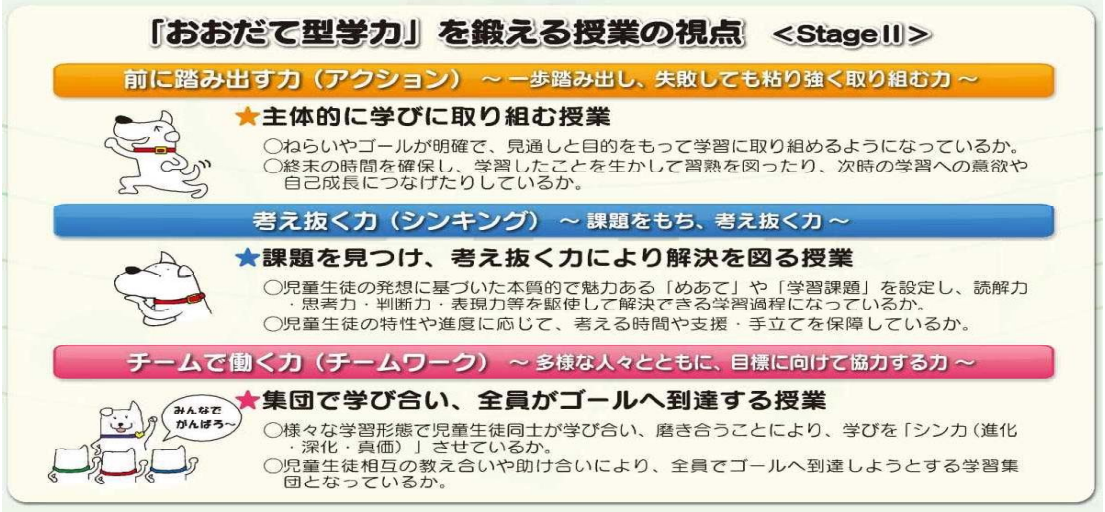
「おおだて型授業（響学)」は、教科の目標を達成するだけに留まらず、「未来大館市民」として不可欠な資質・能力を９年間かけて培うキャリア教育でもあります。各校の「百花繚乱作戦」と授業を通して行うキャリア教育を往還しながら、「大館盆地を学舎に市民一人一人を先生に」子どもたちの知性・感性・人間性が響き合う学びの場が学校や地域の中で展開されることで、自らふるさとの未来を築いていく社会参画の姿勢を身に付けることができると確信しています。

そのためには、子ども一人一人の発達を支えながら、響学の基盤となる共感力を育てることが必要となります。また、共感的・協働的な学び合いを創り出す根幹に、知的な解決欲求と多様な思考を生む教材の準備が不可欠です。その魅力ある教材開発の支えとなる取組が、教科横断的な視点を生かしたカリキュラムマネジメントの充実であり、校種・教科の枠を越えた教師間連携による授業改善等であると考えています。

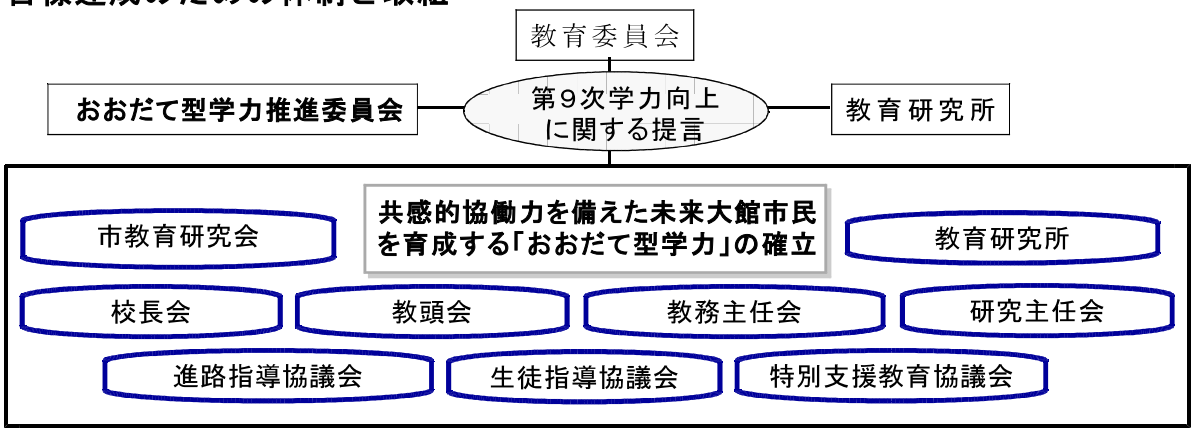
以上、子どもたちが義務教育で身に付けた「おおだて型学力」を、ふるさとの未来を切り拓く力として活用し、いずれ、仲間と共に大館の未来を切り拓くたくましい市民へと育つことを祈念し、平成３１年度から向こう３か年で取り組む、第９次学力向上に関する提言といたします。

2　目標

共感的協働力を備えた未来大館市民を育成する「おおだて型学力」の確立



3　目標達成のための体制と取組



Ⅱ　第８次学力向上に関する提言への取組～最終評価～

（関係機関がまとめた成果と課題、全国学力・学習状況調査質問紙等による実態から）

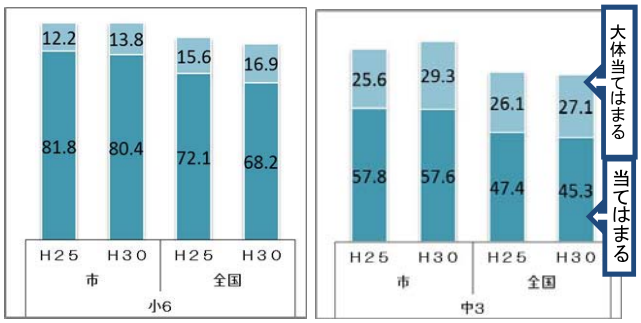
①「ふるさとキャリア教育」を通して、自立と気概の能力を備え、ふるさとの未来を切り拓く未来大館市民へと育っているか。（総合評価）

小・中学校共におよそ９割の子どもが、「将来の夢や目標」をもっている。また、地域のためにすべきことを考えている子どもも、５年間でおよそ１．５倍に伸びている。進路選択の岐路に立っている中学３年生が、将来の自分を具体的に投影しながら地域社会のためにすべきことを考えている姿は、小・中９年間の学びの成果であり、まさに、ふるさとの未来を切り拓かんとする意欲に満ちた未来大館市民の姿と言える。

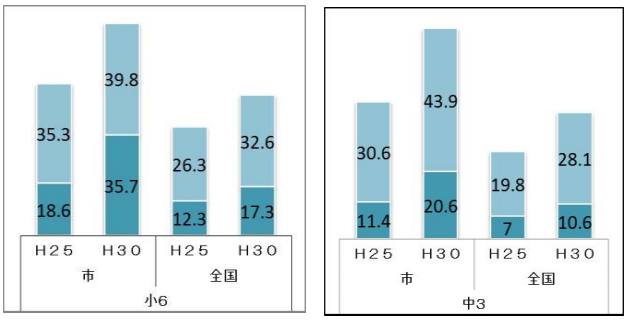
これらは、市全体で育てるべき学力を明確にした上で、各校でふるさとキャリア教育を根幹とした特色ある学校経営を推進したことの大きな成果である。また、「百花繚乱作戦」、「子どもハローワーク」や「子どもサミット」での様々な職業体験や地域貢献活動も、子どもたちができることを実践し、大館の未来、自分の未来を考えるための効果的な取組と思われる。

今後は、新学習指導要領の主旨に基づき、教科横断的な視点を生かしたカリキュラムマネジメントを推進し、これまで育成してきた「おおだて型学力」の一層のシンカを図る必要がある。

将来の夢や目標をもっている



地域や社会をよくするために何をすべきか考えることがある



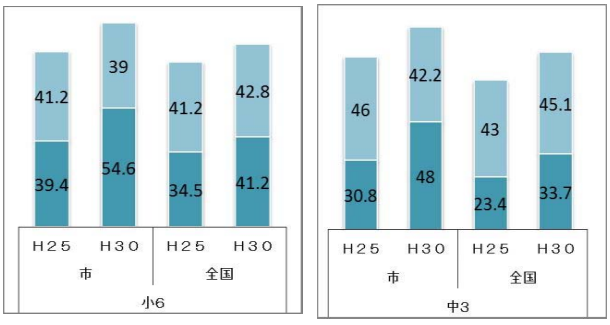
②人間的基礎力は育まれているか。（幼・保・小学生を中心に）

「自分にはよいところがある」つまり自己肯定感が高い小・中学生は、この５年間で９割に達している。これは、授業や行事の振り返りを大切にする等互いに認め合う場の設定に努めてきたことや、地域の中で認められたり頼りにされたりする経験が増えたことによる成果である。この基になっているのは、就学前から育まれている思いやりの心や社会性等人間的基礎力である。

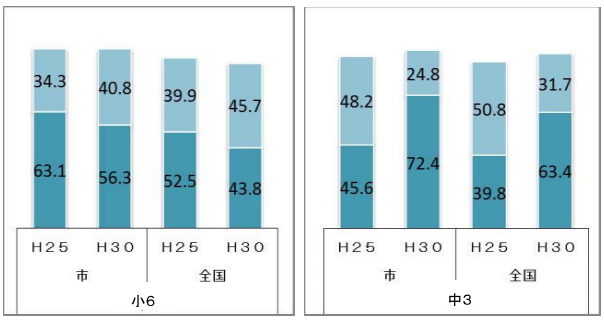
「学校のきまりを守っている」という項目については、小学生では「当てはまる」の数値が大きく伸びており、中学生も９７％を維持している。日常活動として行われている小・中連携のあいさつ運動などにより、下学年にロールモデルが明確となり、よい影響を受けながら成長していると言える。

課題は、支援を必要とする子どもたちの背景が多様化していること、また、とりまく家庭環境も多様化していることである。ここ１・２年で不登校・不登校傾向の子どもが増えていることにも関わっていると考える。子ども理解や学級経営等の研修がより一層必要とされる。

自分にはよいところがあると思う



学校のきまりを守っている



③大館市民基礎力は育まれているか。（小学校中・高学年を中心に）

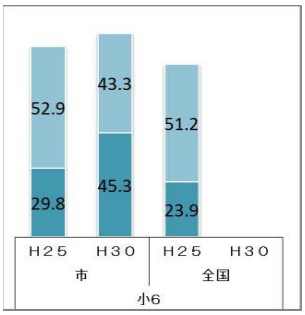
「難しいことでも失敗をおそれないで挑戦している」はおよそ９割に近く、５年間で、小学校では６%、中学校では１０%伸びている。「最後までやり遂げてうれしかったことがある」は、９割と高い数値を示し、よく思うと感じている子どもの伸びが大きくなっている。

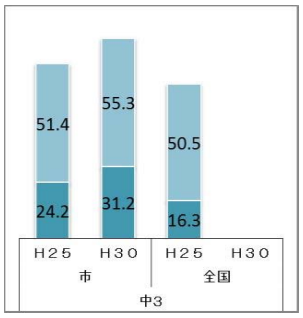
これは、地域貢献活動を通して、地域の人たちから認められ、褒められる経験が増えており、それが自信となって次年度につながっているのではないかと考えられる。教師の肯定的な言葉が子どもたちの意欲となり力となっている。

子どもハローワークや総合的な学習の時間などで、時間や場所が設定されているが、今後は自分たちで課題を見出し、根気強く解決する力を育成するための取組が必要である。大きなことを新たに企画するよりも、これまでの活動を継続する中で、内面的な基礎力が育っていくと思われる。

難しいことでも失敗をおそれないで挑戦している

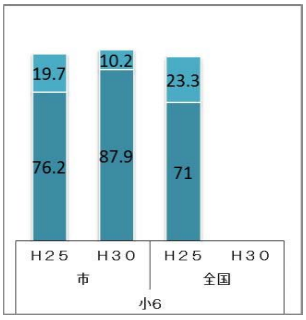
（H30は市独自調査）

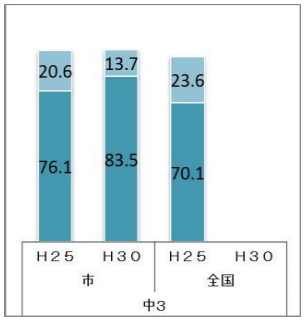




最後までやり遂げてうれしかったことがある

（H30は市独自調査）



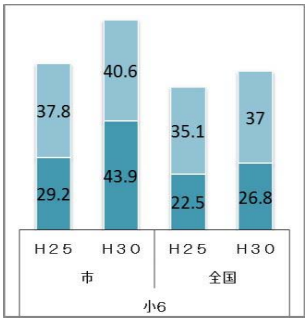


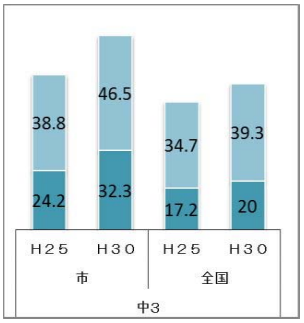
④大館市民実践力は　育まれているか。（中学生を中心に）

地域や社会などでボランティア活動をしたことがある子どもは全国に比べかなり高い数値を示している。特に、中学生のボランティア活動の参加率が高いのは、地域の特色に合わせながら、各校の「百花繚乱作戦」において地域貢献活動を行ってきた成果だといえる。きりたんぽまつりなどのイベントを支えるスタッフとして地域の大人と共に働くことで、社会的使命感や社会貢献力が確かに育ってきている。また、全国に比べおよ１．３倍の中学生が、地域や社会の中で起こっている問題や出来事に関心をもっているのも、活動の企画・実践を通して、地域が抱えている課題を強く意識できるようになってきた表れである。

今後は、集団の中で培ってきた大館市民実践力が、個の力としても自信をもって発揮できるよう「子どもサミット」や「子どもハローワーク」などの場を効果的に活用していく必要がある。個々の伸張が、また大きな協働力となって、未来大館を支えていく力となると考える。

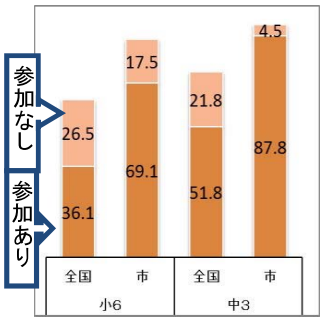
地域や社会で起こっている問題や出来事に関心がある





地域社会などでボランティア活動に参加したことがある

（H30のみ）



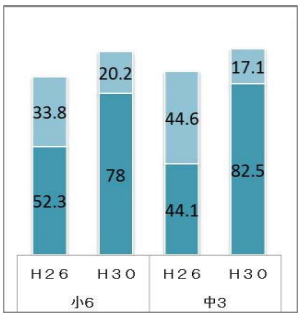
⑤共感的・協働的な学び合いを目指し、おおだて型学力を鍛える授業実践、及び授業改善が図られたか。

おおだて型学力を鍛える授業の視点が授業構想に生かされ、課題設定、学び合い、振り返り等の課題解決型の授業が多く見られるようになってきた。さらに、おおだて型学力の向上に向けた校内研修が、各校とも組織的に一層進められるようになってきたため、５年間で子どもたちの授業への意識は大きく変わってきている。

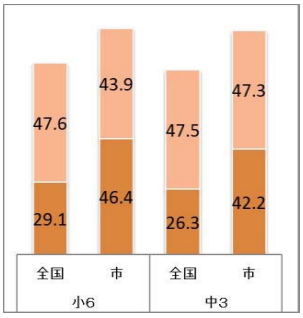
友達と話し合う活動を通して自分の考えを深めたり広げたりすることができていると考えている子どもは小・中学校共に８５％を越えている。各校では、子ども主体で進める学び合い（チャレンジ授業、〇〇タイム、〇〇スタンダード、つながる場の設定等）が展開され、深い学びに到達する授業へつながっていると考えられる。

しかしながら、学習形態の工夫、対話を主とした学び合う場を設定してはいるが、子どもの思考の深まりに有効に機能している授業はまだ多くはない。子どもの思考力・表現力・判断力の深まりがどの程度か、その見取り方を検証していくことが必要である。今後も、子どもを主体的・深い学びへと到達させるための、教師の教材研究力やコーディネート力の向上は欠かせないものとなる。

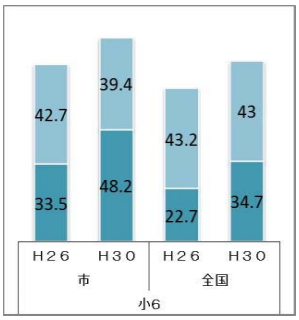
学習内容を振り返る活動をよく行っている

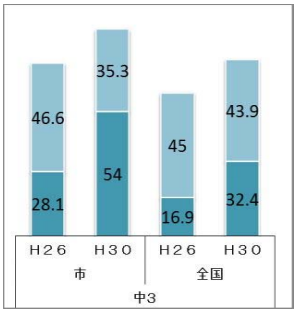


課題の解決に向けて自分で考え自分から取り組んでる
（H30のみ）



友達と話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、広げたりすることができていると思う



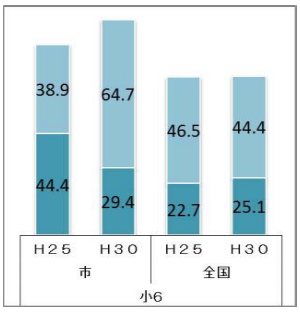


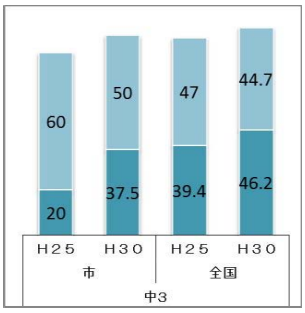
⑥教職員が目的を共有し、校種・教科の違いを越えた共同研究・共通実践となっているか。小・中学校の9年間で計画的・系統的に育てることができているか。

実践的な研修の積み重ねは、小・中とも「当てはまる」の割合が上昇している。各校の成果にあるように、子どもたちの学び合う集団としての育ちが見られるという結果は、授業改善と研修との相乗効果と考えられる。また、中学校区では共通の課題や実践事項を焦点化して、小・中合同で取り組んでいる。生活・学習習慣については、小・中連携がよく図られており、授業研究に関しても、全体的な傾向として高いレベルを維持している。中学校の出口を見据えながら、９年間というスパンで子どもたちの成長を考えている成果である。

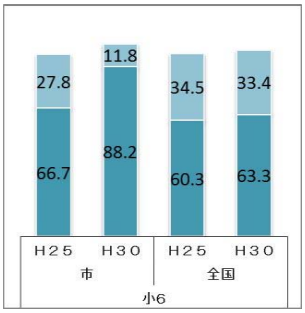
今後は、教科の枠を越えた共同研究の体制づくりを行うことが求められている。更に地域や保護者を巻き込み、ねらい等を共通理解した上での活動にしていく必要がある。活動を開かれたものにし、共有化し、相互評価し合うことで、質的向上を図る必要がある。

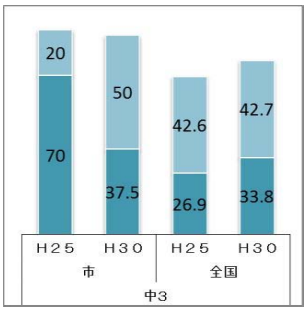
模擬授業や事例研究など、実践的な研修を行っている
（学校質問紙）





近隣等の小・中学校と授業研究を行うなど、合同して研修を行った
（学校質問紙）





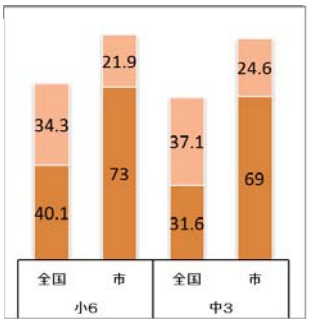
⑦学校と地域社会・家庭が一体となり、未来大館市民を育成する意識と責任を持って取り組んでいるか

およそ９５％の子どもたちが、授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人たちと関わったりする機会があったと答えている。また、指導計画の作成にあたっては、地域の人的・物的資源等を効果的に組み合わせているという設問には、全ての小学校で「当てはまる」「だいたい当てはまる」、半分の中学校で、「当てはまる」と答えている。それは、各校の特色を生かしたプロジェクトの展開と継続、地域と一体となった職業体験、防災活動、福祉活動などの取組の成果である。そして、地域コーディネーターがその活動を効果的に支えている。

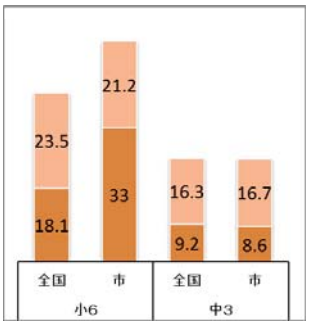
今後は、新学習指導要領の実施に即して、体験活動の質を高めていくと共に、現状の連携体制を維持していくことが必要である。地域人材の発掘、ＰＴＡの活性化等を図って、未来大館市民を共に育成するという意識を一層高めつつ共同を図ると共に、体験活動の精選、活動のねらいを理解した上での地域の参画が課題である。

（※４調査共にＨ３０年度の調査のみ）

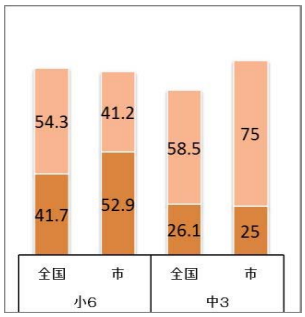
授業や課外活動で地域のことを調べたり、地域の人とかかわったりする機会があったと思う



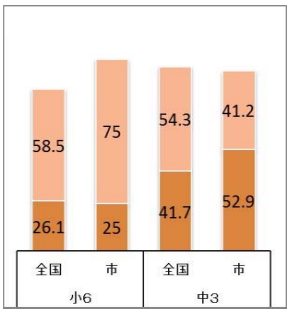
地域の大人（学校や塾の先生を除く）に勉強やスポーツを教えてもらったり、一緒に遊んだりすることがある



教育課程の趣旨について、家庭や地域との共有を図る取組を行っている



指導計画作成にあたっては、教育内容と、教育活動に必要な人的・物的資源等を、地域外部の資源を含めて活用しながら効果的に組み合わせている　(学校質問紙)

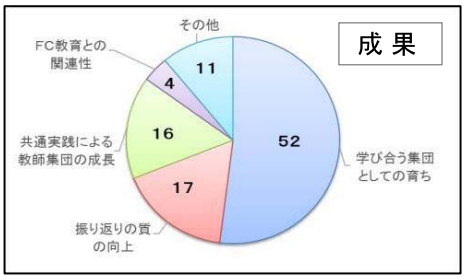


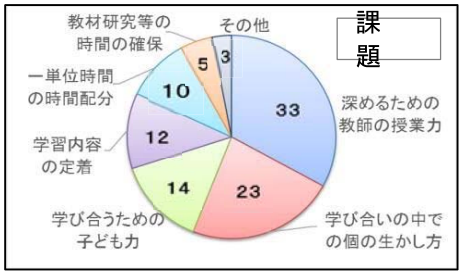
⑧各校の成果と課題・秋田県学力向上フォーラム参加者のアンケートから

学校の成果を集約した結果を見ると、半数以上の学校で学び合う集団としての育ちが見られると答えている。このことから、市の教職員が子どもの成長を実感し、誇りに感じていることも伺える。また、学力向上フォーラムの参加者のアンケート（４段階評価）からは、小・中学校共に、「ねらいとゴールの明確化」で高い評価を得ている。

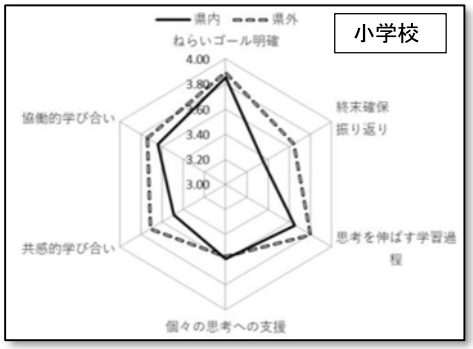
これは、ねらい・学習活動・評価の整合性を図り、子どもたちの思考や反応を予測しながら、学び合いによる課題解決型学習を実践してきた大きな成果である。そして共通実践による教職員集団の成長も、子どもたちの育ちと大きく関わっていると考えられる。

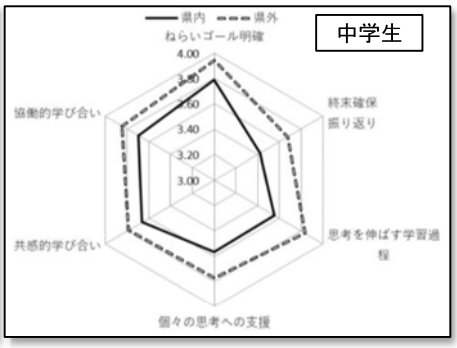
「おおだて型学力」育成への取組：各校の成果と課題





秋田県学力向上フォーラム参加者のアンケートより





今後は、学びを深めるために、子どもの表現力等基礎的学力を育てながら、個を生かした学び合いをつくること、そのためにも教師の授業力を高めることが課題となる。また、教科の学習と実社会の関連を意識しながらの振り返りを、単元の中で計画的に行うことも大切である。